

# 價值形態發展の方法論に

## 關する一斷章

鈴木 圭 介

この小稿の對象は、資本主義の内在的法則たる價值と、その最も端初的にして且つ基本的なる形態より出發して最も顯著にして且つ日常具體的な形態へまで發展の法則の一斷面に關する分析である。それにつけても、今この稿の筆を起さうとするにあたつて、筆者の胸裡にフランスの産める偉大なる一自然主義作家の言葉が浮び出さずにはゐられない。『實際今日の世に苟くも物を書かうとするのは、氣ちがひか、向ふ見ずか、傲慢不遜のものか、もしくは馬鹿でなければならぬ！ いかにもさまざま異なる性質と、いかにも多様な天才とを持つた多數の大家の出した後に爲されなかつた何事が爲さるべく残つてゐるか、言はれなかつた何事が言はれる爲に残つてゐるか？ われ／＼のうちで誰が今までの書物の中で見つけられないやうな殆ど同じでないやうな一章、一句を書いたと言つて誇り得るか？ あり觸れた手法で自分の讀者を喜ばさうとするだけの人は、自分の凡庸をさらけ出して、無智で懶惰な徒だけを目ざした作品を安信して書いてゐる』と。彼がすぐそのあとに續けて『天才ある人々は恐らくこの懊惱

とこの苦痛とを知らないであらう』し、然かも『才能とは根氣である』と結論して、誰かに吾々を慰めようとして呉れても、最初の鋭い言葉は筆者の心を剗つて、殆ど癒し難い傷を與へたかの如くである。まして價值論の如き分野に於ては、先人のしやぶり滓の骨の間に僅かに残つた肉片を探すのも誠に至難といはねばならぬ。しかも尙、筆者にして會誌の爲に敢へて一文を草する事が義務付けられてゐるとすれば、僅にこゝにノートの整理とその間に生じ来る二三の難問の解決を試みて、その責を塞ぎ度い。

## 一

行論の順序として先づ價值の發生に簡單に觸れやう。イギリスに於てはウイリアム・ペティーに、フランスに於てはボアギユベールに始まつたと稱せられる古典經濟學の創始者達に既に知られてゐた二つの價值とは、云ふまでもなく價值と使用價值とであつた。

古典經濟學派の最善の代表者の一人、アダム・スミスによつて書かれ、リカードによつてその著『經濟學及課税の原理』の開卷第一頁に引用あれたる有名な章句によれば、『價值といふ言葉は二つの異つた意味を持つてゐることを注意しておかなければならない。即ち、ある時にはその言葉は、ある特殊な對象物の効用を表現し、或時には、それはその對象物の所有から生ずるところの、他の貨物を購買する力を表現するのである。前者はこれを『使用價值』と呼び、後者はこれを『交換價值』と呼んでいゝであらう』（アダム・スミス『國富論』春秋社版上巻、三十四頁）

今先づこゝに、價值の、從つてまた商品の發生前の社會を考察して見れば、この二つの價值の中自然的範疇たる使用價值のみ存在し、私的勞働と社會的勞働の直接的不合致は未だ存在しなかつた。そこでは、個人の勞働は直接に社會の爲の勞働であり、社會の爲の勞働は直接個人の勞働であつた。この社會的勞働と個人的勞働との直接的合致を阻害した最初のもは、私有財産の最初の形態たる種族財産であつた。種族財産及び社會的分業の發達は各種族間の共同生産と同時にその生産物の共同消費を妨げ、一種族によつて所有される過剰生産物が、他の種族によつて消費される爲には、交換の媒介を経ざるべからざる状態に到達するに至つた。社會的分業のますく高度化し財産の形態のますく發展するにつれて、交換は各種族の内部に侵入し、遂に商品生産が一般化した現在にあつては交換は常に一切の生産と消費の紐帶と化するに及んだのであるが、この交換の準尺こそは價值（交換價值）であつた。即ち、價值とは、今や直接には社會的勞働ではあり得ない私的勞働が、間接に全社會的勞働として如何なる地位を占め得るかとの標識としての獨特の形態たる抽象的勞働の結晶である。換言すれば、私的勞働と社會的勞働の不一致は、それが不一致として止まる限り、人間の社會的紐帶を切斷し、人類は社會的動物としての自己を實現し得ざるに至るが故に、この兩者の對立不一致は、抽象的勞働と具體的勞働の對立的統一に自己の運動形態を見出し、抽象的勞働は價值形成勞働として、具體的勞働は使用價值形成勞働として對立的兩極を爲しつゝ、こゝに生産物は商品に轉化したのである。

扱こゝに於て、問題が生ずる。即ち、商品に内在せる二重的存在たる、抽象的勞働と具體的勞働の兩者は、互に

自己の正反對物として相排し合ふ兩極的對立にあり乍ら、然も又互に他の存在を俟たずしては、自己を實現し得ざる相互依存性を有する對立物の統一の狀態にあり、且つ價值法則の、從つて又商品生産社會に内在する法則の根本的端緒的矛盾として、あらゆる現象のそもぐの出發點を形成してゐるのであるが、この矛盾に於ける、その運動の方向をも決定すべき主導的優位的なるものはその何れであるかの問題これである。吾々はこの問題に解決を與へる前に先づ現在吾々の問題にしつゝある商品の正體を一應つきとめて置かねばならない。吾々の問題にしつゝある商品は、分析の對象が資本主義である以上、資本主義的商品でなくてはならぬ。然るに資本の最初の形態は貨であり貨幣は價值形態の特殊な段階にあるとすれば、問題とさるべき商品は自ら資本主義的商品でありつゝ、然も理論的分析の段階は未だ資本を捨象したるスミスの所謂『資本の蓄積もなく、土地の所有もない初期の野蠻な社會狀態』の下に於ける商品に對應せねばならぬ。然るにこの『初期野蠻の社會』に於ける生産の根本的衝動は、資本制下のその如く剩餘價值の追求になくして、慾望の充足たる消費即ち使用價值追求にあるのであり、價值生産は使用價值生産の一つの媒介たるものであり、抽象的勞働は具體的勞働の自己實現の爲の架橋たるのである。故にこの商品に内在せる根本的矛盾の主導的優位的なるものは、使用價值乃至は具體的勞働の側に歸せられなくてはならぬ。かくして、吾々は最初の問題を解決し行論の最初の礎石を置き得たわけである。一切の複雑極る價值價格現象はこれよりして發生し行論の線はこれに沿つて行はねばならない。

## 二

簡單を期する爲に、吾々は現實の出發點たる具體物より出發して再び出發點を結論として歸り來る方法を用ひずして（今それに觸れないとしても既にそれは前提たるものである）最初より具體物を結果とし、最も抽象的にして單純なるものよりの出發を試みて來たのであるが、この最も抽象的にして單純なるもの、詳言すれば、高度の發達を遂げた具體物の一つの從屬的關係としての最も單純なる範疇より豊富な規定を有する總體としての具體物への上昇の最初の一步として、價值形態の最初の段階に眼を向けねばならぬ。

この最初の段階とは、謂ふところの單純なる價值形態である。こゝに於て、矛盾を孕める統一たりし二つの對立物は始めて自己の具體的表現を發見する事によつて、內在的矛盾の一應の解決を見るに至る。即ち、價值及び使用價值は社會的の刻印を帶び、現實的交換に遭遇せざる限り、矛盾は矛盾のまゝ放置され、價值も使用價值も共に壓殺し去られ自己實現は不可能とされるが故に、この矛盾の揚棄の爲に、運動の爲に形態として最初の價值形態を採つたのである單純なる價值形態の兩極は、個別的なる相對的價值と、同じく個別的にして偶然的なる等價とによつて構成される。相對的價值形態にある商品は、等價形態にある商品によつて自己の價值を秤量さるゝ商品であり、等價形態にある商品は、結局同じ事であるが秤量の觀點から云ふならば、その準規である。今相對的價值形態にある商品の所有者から見ると、相對的價值形態にある商品は、自己にとつて價值であり、他の價值形態にある商

品は彼にとつて使用價值でなければならぬ。けれども吾々は果してこれを字句通り解して前者を價值、後者を使用價值と斷じ去つてよいであらうか？ と云へばそれは大きな疑問である。今、ひと度視點を變へて、より發達せる具體物たる貨幣を見るに、貨幣は後述する第四の價值形態に於ける等價形態である。故に等價形態が果して使用價值であるとするならば、貨幣もひとしく使用價值でなければならぬ。然るに貨幣は、金乃至銀商品としての特殊な使用價值を論外として、貨幣自身として形式的な使用價值を有するのであるが、この一般的等價としての特殊な社會的使用價值を使用價值として問題とするならば、凡そ等價形態にある商品は、相對的價值形態にある商品と共に使用價值を有する點に於ては撰ぶところないであらう。要は、貨幣が價值形態のうちに於て、價值として作用するか使用價值として作用するかにある。然して、貨幣は、形式的な使用價值自身に於ても、價值そのものを使用價值として有し、自ら價值塊又は價值體として作用することによつて、貨幣以外の一切の商品との對立を構成するのである。貨幣が使用價值であるとの最初の前提を裏切つて、貨幣が價值であるとするならば、推論の破綻を救ふ他の一つの方法は貨幣は等價形態であるとの後の行論は誤りであり、貨幣は價值であり、然して相對的價值にあるのであるとする事によつて得られる。貨幣が相對的價值形態にあるかとの問に對しては、簡單に之に答へる事が出来る。貨幣が相對的價值形態にあるとするならば、他の商品はこれに對して等價形態を占めるであらうが、人は、貨幣を取得する爲に商品をもつて、貨幣の價值額を秤量するであらうか？ 事實はこれと反對に、商品の價值額の秤量の爲に貨幣をもつてその商品の價格を決定するのである。即ち、貨幣は、相對的價值形態にあつて、自らを秤量さる

商品の發展せるものにあらずして、自ら他商品の秤量に参加する等價形態にあるのである。故に、貨幣は價值であり且つ等價形態にあるとの結論に到達せざるを得ないのであるが、價值形態の大前提とも云ふべき、相對的價值形態にある商品の所有者よりすれば相對的價值形態にある商品は價值であり、等價形態にある商品は價值であるとの斷定と如上の結論とは全然背馳するものの如くである。この二者を調和せしむる爲には、相對的價值形態にある商品は使用價值であると同時に價值であり、等價形態にある商品は使用價值であると共に價值であるとせねばならぬのである。前に觸れたるが如く如何なる商品も價值と使用價值との二重體であり、その限りに於て相對的價值形態にある商品も等價形態にある商品も、商品としては夫々價值であり且つ使用價值であるのであるが、此處に於ては單なる商品としての商品が問題であるのではなく、價值形態に於てそれ／＼獨自の役割を果す二つの商品が問題なのである。商品に於ける價值と使用價值との對立は、價值形態に於ては二つの商品によつて表現され、一つの商品が使用價值であるとするならば、他は價值としてこれに對立する。然るが故に、この價值形態の兩極は、自ら夫々價值であるか使用價值であるかを瞭かにせねばならぬ。この二律背反は、たゞ等價形態はその現物形態をもつて相對的價值形態の價值を表現すると云ふ特殊の作用の理解によつて解決される。即ち、等價形態にある商品は、相對的價值形態にある商品の價值を秤量し表現するが故に、秤量されつゝある價值はたゞ相對的價值にある商品の價值のみであり、等價形態にある商品の價值はその表現の場所を見出してゐないわけである。等價形態はこの作用の故に價值の存在の價值であり、價值の結晶體であり價值物である。相對的價值はこれに反して影を切りとられた男の

如く使用價值そのものとしてのみ作用する。かくして相對的價值形態にある商品は、その所有者の觀點より主觀的には價值であるが故にこそ價值形態の觀點より總體的には使用價值であり、逆に等價形態にある商品は主觀的に使用價值であるが故にこそ總體的には價值であるのである。

商品に内在せる矛盾の二つの極、使用價值と形態とが、その矛盾の一應の揚棄の爲に、運動の爲の價值として採つたところの價值形態の兩極、相對的價值形態と等價形態との矛盾へ、先の最も端初的な矛盾に於ける主導的優位的なる側面が發展的に保持されねばならないのであるが、價值形態に於ける主導的優位的なるものは、使用價值の存在形態としての相對的價值形態にあるべきであらう。既に見たるが如く、相對的價值形態は單に推論の上でのみ前に端初的矛盾の主導的側面たりし使用價值の理論上の後繼者であるのみでなく、現實的にも、表現される價值は相對的價值形態にある商品の價值のみであり、これのみが自ら價值形態の内部に於いて積極的運動を爲すのである。價值形態に於てかく主導的側面が一つの商品に固著せることは、この單純なる價值形態が、その内的矛盾の運動と狹隘なる局限的障壁との衝突によつて自ら單純なる價值形態を否定し、より發展せる高度の段階たる擴大されたる價值形態に移行する際にも顯著に現れることである。單純なる價值形態の局限的障壁とは、商品の價值が個別的に偶然的に、たゞ一種類の等價たる他商品によつて評量さるゝのみであつて、あらゆる他の商品との比較評量が爲されないところにある。かくの如く、相對的價值形態が個別的偶然的なるに従つて、等價も亦單に個別的等價であり得るに過ぎず、價值が交換を規定せず逆に交換が價值を規定するものゝ如き觀を呈するにいたるものである。



生産力の發達が未だ極めて小であり、過剰生産物は極く稀であり、交通亦甚だしく未開の時代には、交換は極度に偶然的であり、過剰生産物が商品であるのも瞬間的に過ぎなかつたのであるが、生産力が徐々に發達し、過剰生産物は稍豊富となり、交通も次第に發達を遂げるに従つて、交換は偶然的から習慣的となり、價值形態も單純なる價值形態より擴大されたる價值形態への轉化を完了するに及んだ。擴大されたる價值形態に於ては、さきに單純なる價值形態に於ては、相對的價值形態にある商品はたゞ一種類の等價のみを有したのに止まるに反し、擴大されたる相對的價值は一系列の等價商品を有するに至つたものである。個別的相對的價值と個別的等價との對立が、擴大された相對的價值と特殊な等價との對立に轉化し、矛盾が擴大された基礎の上に展開される様になつても、矛盾の主導的側面は依然相對的なる價值形態の上を去らず、否寧ろより豊富な規定によつて、主導的な側面の確立強固化が爲されるに至つた。即ち最初の價值形態に於いては、相對的價值形態及び等價形態を占める商品は提出された二つの商品の中間がその價值形態に置かれるのも全く自由であり、一商品が全然反對的に對立せる價值形態の何れの極にあるの**いはゞ全然恣意的**であり、従つてこの價值形態を方程式で表現するとするならば、その方程式の兩邊は任意に入れ換へが出来るのであつた。(勿論この入れ換へは必然的に商品がその占める價值形態を變更したことを前提とするのであるが)然るに第二の擴大されたる價值形態に於いては、その相對的價值形態は豊富な諸規定を受け一系列の特殊的等價を有する爲に、若しその方程式の兩邊を恣意的に入れ換へ、一系列の等價商品を相對的價值なりとし、相對的價值形態にありし商品を等價商品なりと呼ぶを許すとせば、忽ち等價形態にある商品は自らの

特殊性を喪失し相對的價值形態にある商品は擴大されたと云ふよりは寧ろ一般的なるそれと化し、擴大された價值形態は自ら一般的價值形態で轉化する事によつて自己否定の結果に陥る爲に、この價值形態の兩極の置換は許されず、こゝに方程式は動かす可からざるものとして確立され、矛盾に於ける主導的側面も亦同様に置換を許さざるものとして、具體的に感性的なものとなつたのである。

第一の價值形態に於て、矛盾の主導性の問題がその價值形態自身の狹隘なる局限性に於ても顯現したるが如く、この第二の價值形態に於ても、その價值形態自身の缺陷は同一の法則によつて貫かれてゐるのである。擴大された價值形態に於ける缺陷とは、第一に、擴大されたる相對的價值の價值表章は未完成であり、第二に、それは錯雜な「寄木細工」であり、第三に、相對的價值形態にあたる商品が異なるに従つて異なる内容を持てる價值表章の限りなき系列をそれ／＼有することこれである。相對的價值形態のこの缺陷は等價形態の上に「正確」に反射せねばならぬ。即ち、第一に相對的價值形態が全然未完成であるに照應じて、等價形態も全く不充分なものであり、續々新たな商品の出現と共に新たな等價形態が生まるに至るものである。次に錯雜な寄木細工的相對的價值に對し、等價形態は全く非統一的な特殊的等價であつて、その價值表章は一つの商品の現物形態であらはされるかと思へば、直ちに他の商品によつて表現され、更に第三第四……と續々異なる現物形態を有する商品によつて表現され、秤量されつゝある商品の價值は統一的等價の缺如の爲にその歸趨に迷ふ狀態である。更に第三に、相對的價值形態が夫々内容の異なる一系列の等價商品を従へてゐる爲に、等價形態も亦た／＼にこの小宇宙の中に於てのみ特定の商品の價值表

章たり得るのみであり、他の小宇宙に於ては又別の關係に入り、この割據的狀態になんらの統一も存在しないのである。以上の缺陷は、生産力の更に著しい増大と、商品交換が更に一般的に行はれるに至ると共に、既に抑制する能はざる状態となり、擴大された價值形態はこゝに否定されて、第三の新たな價值形態への移行が始まる。

この新たな價值形態は一般的價值形態である。さきの擴大された價值形態に於ける缺陷はこゝに揚棄され、一般的相對的價值形態は統一的な一般的等價形態に相對するに至つたのである。一般的な等價形態はこゝに初めて、社會的に必要なる人間的抽象労働を目に見え手に觸るゝ具體物として、吾々の面前に押し出すのを得たのである。然るに、一般的等價となるべき商品は未だこの價值形態に於ては決定されて居ず任意の商品がこれに當るわけであるが、商品交換の發達は、撰ばれた一の商品がこの地位につくことを要求し、遂に、社會的習慣によつて、一般的等價が金銀等の特定の商品に固定する事によつて、最後の形態たる貨幣形態を見るに至つたものである。

最初價值が発生し、生産物が商品に轉化する當初に於けるそもぐの根本的矛盾たりし具體的労働と抽象的労働の二重的性質は、今や貨幣の出現と共に、前に設定したこの節に於ての對象としての資本主義的商品の最初の段階たる資本を捨象したる『初期野蠻の社會』に對應せる限り、最高の段階にまで到達したのである。最初の最も抽象的な段階より、最後の最も具體的な段階へまでのこの展開の推進力は、生産力の發展と交通形態の發展及びそれに從つて商品交換の量的増大であり、それこそかくの如き著しい質的飛躍を遂げせしめたものである。抽象から具體への上昇的發展の過程は、さきに説明せることを再び要約して云ふならば、具體的労働と抽象的労働の即

ち使用價值と價值との對立が、自ら具現化する爲に、使用價值の主導性確保の下に、二つの商品の上に夫々實現しその一つを相對的價值形態に他を等價形態に性格付け、各々使用價值と價值との體現物とせしめた。二つの價值がその最初の現象形態としてとつたのは單純な價值形態であり、その兩極も夫々能動的なる個別的相對的價值と受動的なる個別的等價とであつた。商品交換の發展につれこの相對的價值に對しては個別的等價はあまりにも局限的且つ狹隘なるものと化するに至つた爲に、この個別的相對價值はこゝに否定され單純なる價值形態のアンシャン・レジームは崩壊し新たな擴大された價值形態が打ちたれられ、新たな質を帶びた二つの極、擴大された相對的價值と特殊等價との對立を見たのであるが、更にこの內的矛盾をより豊富な諸規定を有する新たな基礎の上での發展の結果、特殊等價はますます非統一的な自己を曝露し、擴大相對價值と共に特殊等價が、從つて擴大された價值形態が否定され一般的價值形態が出現したのである。一般的價值形態が遂に貨幣形態に移行するや、鮑爛たる貨幣の王國が何人の眼にも疑ふ餘地なく歴然と顯れ、こゝに資本の成立の説明の爲の一切の理論的準備は完了したのである。吾々はこれまで最も幼稚な且つ最も抽象的な段階より最も高度な且つ具體的な段階まで、その胚種形態よりその踊化形態までの矛盾の自己發展と矛盾に於ける主導的優位的なる側面の役割とを、その運動の線に沿ふて追跡して來たつもりである。今や資本の發生と、資本制下に於ける價值法則との分析を試みるところまで來たのである。以下節を改めてこれにあたらう。

三

資本が潜在的な資本たりし貨幣から、資本自らに轉化したる際に獲得せるところの凡そこれなくしては資本たり得ない基本的指標は、それが價值を生む價值であることである。資本が追加的價值を生み自己増殖を遂げるのは、流通を媒介とせる生産に於てあるが、資本が生産行程へ這入る爲の前提は、生産手段と勞働力とである。然もこの勞働力は單なる勞働力でなくして、買はれたる賃銀勞働でなくてはならぬ。價值形態の第四の最も發達せる段階たる貨幣形態に於ては交換機構は強制的となり、一切の物は價格を有し商品化する事は、さきに簡單ながら見たところであるが、この事は勞働力なる一種獨特の生産物も又商品化する爲の根柢を與へ、かくして價值形態の完成を見ると共に、單純なる商品生産の量的完成から一轉して資本の發生、資本主義的商品生産の開始へ移行するに至つたのである。勞働力の商品化と勞働市場口出現とは、從來の單純なる商品交換の代りに、生産手段と流通手段との所有者と勞働形の所有者との對立を導導く。資本の所有者は勞働力を購入して、これを生産的に消費せねばならぬのであるが、こゝに一つの疑問が生ずる。吾々は爾來價值形態の發達とその矛盾に於ける相對的價值の優位とを見て來たのであるが、第四形態の等價形態たる貨幣はそれが等價である以上明かに受動的役割を果すものであり、積極的なものは貨幣に對立せる他の商品界でなくてはならない筈であつた。然るに商品界の完成と共に一切の物が商品化するに至り遂に最も特殊なものとしての勞働力も商品化するや、單純なる商品制下の貨幣は躍然資本に轉化

するに至つたものである。然りとせば、資本は自らの先祖として貨幣を有する關係上、價值を生む價值として主體化する事を得ないものゝ如くである。然るに現實には、資本はその循環の第一段階に於て勞働力の所有者に對し、單に商品の所有者と貨幣の所有者との單純な對立をなすものではなく、生産手段と流通手段との所有者と生産手段を有せざる自己の勞働力のみを所有せるものとの對立であり、勞働に對する資本の可能的支配が存在するのであるが、これは循環の第二段階へ入ると共に現實化し勞働に對する資本の現實的支配が生ずるに至るものである。生産様式が資本主義化するを考慮に入れるとすれば、剩餘價值單に絶對的のそれに止まらず相對的のそれをも生産される事となり勞働の資本に對する形式的服屬が實質的のそれに進むにつれ、ますます資本の優位は顯著となり、資本は價值形態の受動的極たりし貨幣の轉化せるものなるさきの考察と全く矛盾する如くに見える。しかし、この疑問も亦次の如く容易に解決する事が出来る。もし、貨幣形態へ至るまでの價值形態の全發展を通じて、主導的側面その他への轉移が起らないものとするならば——又、事實、前節に於ける簡單極まる敘述よりするもこの轉移のなんらの理由を發見し得ないのみならず、貨幣形態自身他の一切の商品界の價值鏡であり消極的受動的なるものである事を最も判然と告白してゐる——この轉移は、残るたゞ一つの場合たる貨幣の資本への轉化の際に起るものである事が判る。即ち、單純なる商品生産の場合に於ける根本的衝動は、例へそれが賣る爲の生産であるとしても、尙その販賣は、購買の爲の販賣であり、價值を媒介としての使用價值の追窮であるに反し、資本主義生産の直接的衝動は價值増殖であり使用價值を媒介としての價值追窮である。この對角線的に背馳せる二つの生産の目的・衝動はこの

生産の基本的矛盾に於ける主導的側面が全然反對の側に存する事を妨げないのみか、寧ろその轉移を規定する。この主導的側面の轉移に制約されたる矛盾の再出發は例へば、資本の生産行程を見れば一層明瞭となる。資本の循環に於けるこの第二の段階に於ては資本は勞働力と交換關係に於て對立する第一の段階から、勞働力それ自體を資本の一部と轉化し、この對立の接觸・燃焼ともいふべき新しい段階へ入つたのである。此處に於て、資本は現實の追加的價值を生産し、自己増殖を遂げるのであるが、この價值増殖行程は同時に、生産されたる價值の物的負擔者たる使用價值の形成行程・勞働行程でなくてはならぬ。もしこれが資本を捨象せる場合に於てあるとすれば、商品の生産行程は使用價值と價值との同時的生產であり、勞働行程と價值形成行程の對立的統一であるのであるが、その主導的側面はいづれにあるかとせば、使用價值形成の具體的な勞働行程にあるは論を俟たない。然るに翻つてこの生産が資本制下に行はれるとすれば、使用價值はたゞ價值實現の爲の方便であり、勞働行程は價值増殖行程の爲の手段としてのみ存在し、優位は後者に歸せられることは自明である。尙こゝに一言すれば、勞働行程は資本の使用價值の實現ともいふべきものであるが、この使用價值は勿論單なる商品の使用價值と比すれば、幾多の複雑なる形態規定をうけ、より豊富な内容を有する具體的なものである。即ちそれは單なる出來上りの使用價值でなく、資本の使用によつて新たなる使用價值を生産するものであることは勿論、その使用價值は主觀的及び客觀的生產手段としての特殊の質を賦與されたものである。價值増殖行程も同じく、内容豊富なる具體者として現れ、舊價值の移轉——尤もこれは具體的勞働によつて行はれるものである——と並んで、新しい價值を——抽象的勞働によつて

——產出し單に、前貸資本（不變資本及び可變資本）の回收のみならず、又、新たなる追加價值を獲得するものである。（これよりして、生産價格、市場價格の理論へ進むべきであるが、本稿では、これを割愛することにする。）然も價值増殖行程によつて勞働行程は、その生産手段の分量並びに、勞働行程自身の延長及び程度を規定づけられるものである事に思ひ及べば、この兩者の統一とその更に具體的な基礎の上に於ける相互關係、優位的主導的側面も、自らより明瞭且つ深刻たるものがあるであらう。

矛盾のその後の發展については、諸子の御研究に俟つこととし、本稿に於ては、一旦此處に於て打ち切ることとするが、既に幾度か繰り返し述べたる如く、商品生産の最も單純且つ初歩的な段階から最も複雑且つ高級的な段階まで、矛盾の發展はその主導的側面の積極的指示によつて、一筋に貫かれ、新たなる社會的構成體に於ける新たな矛盾に於ては、その主導的側面も又新たな規定と法則の下に再出發を試みるものである事を、不完全乍ら見て來た積りである。更に歴史の發展の巨大なる進行は將來に於てこの法則の新たな現實的證左のいくつかを提供することであらう。